



近くの仲間、遠くの仲間

当日は、予報通りの快晴だった。どんどんと気温も上がり、前日に心配していた風も止んでいた。絶好の卒園式日和：そんな言い回しは当園くらいだろうか。

間もなく迫った開式に向け、着々と園庭に会場を設らえていくのだが、今年の椅子の並びは、例年と少し違っていた。

それは遡ること数週間前の事。「園長先生いる？」という年長児の声に呼ばれて園庭へと出てみると、その中央に円を描くように、内を向いてたくさんの椅子が丸く並んでいる。それも優に直径10メートルはあろうかという大円陣。

聞けば、卒園式の会場レイアウトを、実際に椅子を並べながら相談しているとのこと。「お母さんと並んで座るんだ。」と説明を受けながら、だからこのサイズなのかと納得。「なるほど。お互いが見えて、いいんじゃないかな。」とその発想に感心していると、なんと「座る席は、くじで決めるんだ。」と言う。しかも、式当日、会場入りする時に、親子で抽選

箱から番号札を引くのだそうだ。

保育日誌によれば、この席順については多少意見が割れたようで：最終的に落ち着いたのがこの方法のようだった（5歳児2月28日、3月1・4・13・14・15日の日誌より）。

さすがに、当日に証書を並べ替えるという混乱は避けようと、それを手渡す順番は席順ではなく生年月日に。なので、名前を呼ばれた子が、どの位置から歩み出て来るのかはその日次第。ただそれも、車座なら何の問題もなく：意外によく考えられているシステムに、思わず唖つてしまうのだった。

さて、その円陣をさらに取り囲むように、職員ら他の列席者が着席すると開式。そして、少し式が落ち着いた頃、毎年必ず、もうひとつかたまりの参列者たちの存在に気づくのだ。

それはその日、土曜日の保育に登園した後輩たちが2階の窓に張り付いて、じつとこちらを見下ろす視線。今年こそ会場のみんなでそれを見上げ、手を振ってその一団に応えたいと考えていたのだが、いざ自分の挨拶になった時には、ま

たその事が頭から飛んでしまっていた。ただ今年はその別会場の参列者の様子が、その日の保育日誌に詳しく記録されていた。

そこには、保育者たちの服装に、いつもとは違う雰囲気を感じていること、式を眺めやすい2階の保育室で過ごすことと提案したこと、眼下の会場準備の様子に、あれこれと想像広げていることなどが記されていた。

そして、園庭で職員たちが、式中の歌の伴奏（ウクレレ、ギター、リコーダー、カホンなど）の事前合わせを始めると、その様子に刺激を受け、なんと、その部屋でも保育者のウクレレと子どもたちの鈴の音で、賑やかな演奏会が始まっていたことを私も知ったのだった（3月16日「今日は何の日？」より）。

園内の出来事が、他の何気ない日常と響き合っていく…これが仲間と生きることの醍醐味。「いつも、とりさん（5歳児）がいなくなっちゃう時はそっだよ。」と、周囲で巻き起こるその意味を、その時々



で、それぞれの胸に刻んでいるのだ。

さて、当園の子育てひろば「いずみ」で活動する編み物サークル「アミーゴ」の面々が、能登半島地震で被災した子どもたちを送りたいと編み貯めてきた、二百余りの毛糸の帽子。先月の初め、段ボール5箱にもなったそれを発送しようとした時、この「ひぐらし」の1月号でも紹介したある事を思い出したので。



それは「何かに使えるくらいよくできている」「このまま終わりにしたらもったいない」と子どもたち自身が手応えを感じていたあの模造紙の描画。すぐに子どもたちに了解を得て、少し味気ない段ボール箱をこの造形作品で表装してみると、生命力が宿ったような味わいのある箱に変身した。

そして後日、窓口となつてくれた石川県の仲間の園から、こんな御礼状が届く。

先ほど素敵な箱を5つも受け取りました。手始めに、輪島市から自園に緊急入園した年少児に被つてもらうつもりです。思ったよりたくさんいただいたので、知り合いの園を周り、一つ一つ手渡しできればと考えています。

本当に心温まる贈物をいただき感謝です。アミーゴの皆さんや子どもたちにくれぐれもよろしくお伝えください。取り急ぎ御礼まで。

時には、ずっと遠くの人たちとも響き合っていきたい。それが、会ったことのない人たちであっても。

園長 折井誠司

- 編集 幼保連携型認定こども園せいび
- 発行人 折井 誠司
- 印刷所 幼保連携型認定こども園せいび
- 発行所 社会福祉法人 誠美福祉会

〒192-0364 東京都八王子市南大沢1-2  
電話 042-697-1155  
ファックス 042-677-5643  
Email seibi@kodonomokyo.jp  
http://kodonomokyo.jp